

井伊直虎・直政と戦国社会

久保田 昌希

はじめに

私は駒澤大学の文学部歴史学科に所属しております久保田昌希と申します。専門は日本中世史、とくに室町から戦国を経て、そして徳川幕府が開かれる辺りまでを研究の対象としております。フィールドは東海地方、駿河、遠江、三河。静岡県と愛知県の東部ですね、その辺の研究をしておりますし、それだけではなく、関東の方にも興味を持ちながら成果を出すように努めております。

今回、駒澤大学禅文化歴史博物館（以下「禅博」とも）で特集展『松平家忠日記』に見る井伊直政と戦国社会』というささやかな規模ではありますが明日まで行なわれており、『家忠日記』という日記を展示しています。これは、このあと申しますけれどもこの時期の戦国時代の武家の、しかも自筆の日記ということで史料的な価値が非常に高い。これは政治の大きなうねりから離れた日記ではなくて、まさに家康の家臣ということで、家康の周辺にいた一人の記録として非常に貴重な史料です。縁あって駒澤大学図書館に寄贈を受け、たぶん本学が持っている史料の中では一番の売れっ子で、今禅博で二冊ほど見開きで展示しておりますけれども、別に彦根の方でも展示していると。これは少し前に江戸東京博物館で井伊直虎の特別展をやった時にも展示されるなど、非常に有名な史料であります。今日はこの機会をいただきます。本学関係者でもこの史料的な価値を知っている方は少ないと思っておりますので、この機会に広く知っていただきたいと、『家忠日記』を中心にお話をさせていただきます。

しかし非常に欲張りなんですけれども、今日はどこに焦点をあてていいのか考えました。タイトルには「井伊直虎・直政と戦国社会」とありまして、これは大河ドラマを意識して、本展示を企画された学芸員の塚田さんがつけたタイトルであるというのとは間違いありません。これに加えて、本学の禅ブランドイング事業の責任者の一人である経営学部の青木先生もここにお出ですが、やはり禅宗との関わりもお話ししてみようと思えました。足りないところは幸いにも禅博館長の飯塚先生や前学長の廣瀬先生もお出ですから、専門的なところはお譲りして私は分かる範囲でお話ししようと思えます。

なお「はじめに」のところではいいましたが、駒澤大学図書館には『家忠日記』として伝わっておりますが、『松平家忠日記』としたほうが一般の方には伝わりやすいと思ひ、そう表現しております。

先ほど申しましたように、この日記は戦国織豊期の武士の日記としては、もっとも有名な史料で、記事には家康はもちろん、信長、秀吉ですね、また酒井忠次、本多忠勝、井伊直政といった徳川家臣団や様々な戦国武将の名前が登場します。家忠が全部これらの人に会ったというわけではありませんけれども、いろんな話を聞いて、それをうけて記載していますので多くの戦国武将の名前が登場するわけです。

数年前に私は編者として『家忠日記』を中心とした論文集を出しまして、その時に記載されている人名と地名の索引を入れたんですけれども、その人数は六百名を越えますから非常に多くの人々が登場するということです。

そこで今年の大河ドラマの主役たる井伊直政も出てきますので、直政を中心にそ

れと関わって女城主直虎、そして記主の松平家忠についても紹介し、さらに武将たちの日常における修養をめぐって禅との関係も視野に入れてお話しをしてみたいと思っております。

## 第一 松平家忠と『松平家忠日記』

### 『松平家忠日記』について

まず、『松平家忠日記』（以下『家忠日記』）についてですが、これは家忠による自筆の日記で、現在は天正五年（一五七七）一〇月一四日から文禄三年（一五九四）九月までの約一八年間の記事で構成されています。「現在は」といいたしたのは、その部分が伝えられているからです。最近では『家忠日記』の研究が進んできまして、日記の始まりを永禄一〇年（一五六七）頃からとする説も出されていますが、永禄一〇年ですと家忠は一二歳の時で、それは少し早いのではないかと思います。永禄一三年すなわち元亀元年なら一五歳ということで、その可能性も出てきます。しかし天正五年の二年前には長篠の戦いがあり、家忠の父伊忠が戦死し、これを機に二〇歳の家忠が跡を継ぎ、日記をつけていったとする考え方のほうが今のところ、なお妥当だと思います。今後の研究課題でしょう。

家忠は慶長五年（一六〇〇）八月、関ヶ原の戦いの前哨戦とされた伏見城の戦いで毛利氏らに攻められて鳥居元忠・内藤家長とともに戦死をしております。もし家忠が日記を伏見城まで持っていたら、日記は残らないわけです。しかも後半の文禄年間の残りの部分はボロボロになった状態で伝わっておりますから、その辺までしか日記は伝わっていないわけで、その辺りで日記は終えていると思います。

『家忠日記』についての書誌学的な研究は、かつて東京大学の岩沢愿彦先生による「家忠日記の原本について」（『東京大学史料編纂所報』第二号）があり、これは昭和四二年（一九六七）に発表されたもので当該研究の基本的な位置を占めています。それによれば『家忠日記』はもともと一冊であったようです。その後東京大学史料編纂所で補修・修補して七冊に分冊し、それが深溝松平家に伝えられており

ましたが、本学の関係者と同家とのご縁がもとで、同家から本学に寄贈していただいたと聞いております。

なお日記の原本は駒澤大学図書館HPの「電子貴重書庫」を開いていただきますと、そこに写真が載っておりご覧いただくことができます。また翻刻は、かつて岩沢愿彦先生の校訂により『家忠日記』（史料大成一九）として刊行されております。『家忠日記』の現状は、全七冊合わせて合計四一六丁で、東大で新たに大体二年から三年分を一冊に仕立てたわけです。料紙一丁の裏表に六日から九日程度の日数分量が書かれております。

日記には月日と干支、それから天気、日々の記事が書かれています。記事は簡略で、感情や感想は交えておらず、むしろ淡々と書いています。よく中世の公家日記でいろいろ自分の感想を記している例がありますが、『家忠日記』についてはそれらを記していません。

例えば、本能寺の変の記事もありますが、信長が殺されたことについて家忠がどう思ったのか、せめて一二行でも記してあればと思いますが、残念ながらそういうことはありません。もちろんそれで史料的价值が下がるということではありませんが、同時代の公家や僧侶の日記とは異なる印象を持ちます。多くは家忠が体験した事実と伝聞した内容を淡々と記述しているということに成り立っています。それから、文字のない空白部分にはいろいろと面白い挿絵が書かれており、誰が書いたのか、私は家忠が書いたと思っておりますが、非常に興味が尽きない日記です。

享和四年（一八〇四）、忠馮が藩主の時代に、一代将軍の徳川家斉の上覧に供されまして、家斉からめずらしいものであるから大切にせよという指示をえております。

### 松平家忠と徳川家康

井伊直虎、次郎法師、直政の話をする前に、この松平家忠という人物についてですが、彼は弘治元年（一五五五）の生まれで、没年は先ほど述べた通りです。通称は又八郎、官途名は主殿助、三河国深溝城主で家康に従い数々の戦歴とともに、城

普請などにも多く関わっています。いわば家康の天下取りにとって重要な役割を果たした人物といえます。

ところでこの「深溝」、深い溝と書いて「ふこうず」とよみますが、文字の表記では他の史料に「ふかうそ」とみえています。『家忠日記』でも同じです。ただし『家忠日記』の写本では「ふかうす」と読んで書写しています。また「ふかうす」と記している戦国期の文書もあります。この深溝の松平とは、徳川家康の先祖、古くは三河にやってきた親氏から始まり、泰親、信光、親忠、長親、信忠、清康、広忠という松平八代がありますが、初代親氏は今の愛知県豊田市内、かつての松平町といったその一番奥に住み着きました。その地が松平郷です。そこから松平の一族が岡崎の平野に出てきます。三代信光の頃、それが大体、応仁の乱以前です。

信光は松平郷から岩津という岡崎の北の方ですが、そこに出てきます。その後、三河の平野地域に一族が広く分派していきます。それを一六松平とか、一八松平ともいわれますが、それぞれの在地名をとりまして何々松平といえます。当時はそう呼ばなかったのでしょうか、今は研究上呼んでおります。その中の一つが深溝松平といまして、深溝というのは、愛知県額田郡幸田町に所在する大字です。この深溝に土着した松平氏の一族が深溝松平という家を作っていきます。初代の忠定は、先の信光の七男忠景の次男で、以後は二代好景、三代伊忠と続き四代家忠の時代を迎えます。家忠の室は水野氏の出身です。水野は、家康の母親の於大の方の系統です。そして於大の弟である忠分の娘が松平家忠に嫁ぎます。そこで家忠の室は家康の従姉妹ですから、松平家忠と徳川家康は義理の従兄弟での関係、従兄弟同士ということになるわけです。したがって家康とは非常に近い関係にある武将であるといえます。

なお深溝は、東海道本線の駅でいいますと、三ヶ根という駅です。そこから徒歩で行けます。深溝には、深溝城跡とか、それから『家忠日記』には「会下」とでています。本光寺という深溝松平家の菩提寺があり、また縁ある深溝神社や三光院などもあります。『家忠日記』をお読みいただくとともに、現地も歩いていただくと非常に豊かな歴史像が蘇ってくると思います。

## 江戸時代の深溝松平氏

この深溝松平の家は、天正一八年に徳川家康が関東へやってきましたけども、その時に一緒についてきます。そして、最初は武蔵川越(埼玉県川越市)に入る予定でしたが、それが急遽変わって忍です。今の埼玉県行田市、ここに一万石が入ります。そのあと下総上代(千葉県旭市)、同小見川(同香取市)に移り、家忠が亡くなった後は、その息子の時代に三河吉田(愛知県豊橋市)に戻り、その後丹波福知山(京都府福知山市)、それから肥前の島原(長崎県島原市)に行きます。そして、さらに一時下野宇都宮(栃木県宇都宮市)に移り、ふたたび島原にもどり、そこで明治維新を迎えます。だいたい約六万石の大名です。今、島原に本光寺というお寺がありまして、深溝にも本光寺がありますが、同じ曹洞宗の寺院です。深溝松平氏の転封にもなっており、その地に本光寺が領主の寺として移し存在していたことは、例えば『家忠日記』文禄元年(一五九二)九月一日の条に「本光寺ニふる舞候」とあり、上代にも本光寺が存在していたことからわかります。

## 第二 戦国時代の東海地方

戦国時代の東海地方、これは井伊氏も含めてのお話ですが、なんといっても戦国時代の東海地方は北条、武田、今川の動き、それと関わって松平・徳川ですね、さらに織田とのつながりが関わって歴史が展開していきます。私は考えるんですけど、東海地方で戦国時代の一番大きな出来事としては、やはり今川義元、武田信玄、北条氏康による、いわゆる三国同盟ですね。駿甲同盟、これが天文二十一年(一五五二)〜二十三年にかけて成立します。

そして、それが破綻するのが永禄一一年で、これは信玄が今川領国に入ってきました。北の方から、つまり身延の方を回って富士宮から入ってきて、駿府を襲撃する。これが永禄一一年一二月半ばごろです。駿府を襲撃された今川氏真、大河ドラマでの氏真は随分人気があって、また出てくるみたいですが、氏真の室である

早川殿が、おそらく氏真の尻をひっぱたきながら、遠江の懸川城まで逃げていくんです。懸川城で今度は、徳川家康が西の方から井伊谷三人衆に導かれて、三ヶ日の方から入ってきます。そして懸川城を囲むわけです。懸川城を囲んでつぎの年の永祿一二年五月に今川氏真は懸川城を開城して、早川殿の実家である北条氏の領国に移っていくわけです。これによって遠江国は武田と徳川の抗争の地になりますし、駿河も武田と北条の抗争の場となったり、それにその他の勢力が関わってくるようになります。いわば戦国時代の後半は東日本の場合でいいと、北条、武田、徳川による今川領国の分捕り合いと、それに織田も関わっての戦争が元亀・天正年間にかけて展開していくわけです。

この頃に、井伊谷も非常に苦勞しているんです。これは大河ドラマで皆様方のうち、ご覧になった方も多いかもしれませんが、井伊氏歴代の当主が殺されてしまう、不慮の死にあってしまっただけで、なかなか次の当主が決まらないということ、女城主・次郎法師が登場してくるといような筋書きになってくるわけですね。そしてその後、これはいくつか説がありますが、三河の鳳来寺であるとか、浜松の近くの松下家であるとか、そこに退いていた虎松、あるいは万千代といわれた直政が、天正三年におそらく井伊家の人々のいわば連係によって、家康に見いだされたことを契機に直政は家康の小姓となり、そこからのちの井伊氏の発展があるという筋書きが展開してくるわけです。

遠江の領主、井伊氏は浜松の北の方にある井伊谷が、その勢力基盤です。井伊谷は現在の静岡県浜松市北区引佐町です。私は学生諸君と毎年、井伊谷の近くの三ヶ日（静岡県浜松市北区三ヶ日町）に文書調査を、廣瀬先生も一緒にさせていただくこともありました。おこなっています。今年の夏は大河ドラマの舞台ということ、久しぶり寄ってみました。そうしたら「大河ドラマ館」が建っていて、すごい人でした。九月初めに五〇万の来訪者という数で、やはり大河ドラマの力つてすごいなと思います。去年も上田の方に学生諸君と合宿でいきましたけれども、そのときも現地は賑わっていてすごいと思いましたが、何にもないところにあれだけドラマ館も建てて、多くの人がやってきて、すごいことだなと。しかし、この後の様

子も心配にはなりますが、でも地域興しにはいいと思います。とくにまた地域を見直すという機会が与えられていいことだと思います。

話しがずれてしましますが、大河ドラマの効果といましようか、かつて歴史研究者の中にはNHKには悪いんですが、大河ドラマへの批判はないことはなかったですね。また、歴史の真実とドラマは別という認識があったと思います。それは今年ありますが、去年は真田で、今年は井伊ですが、ドラマの筋はともかくとして、井伊氏の本当を研究しようとか、それから去年の真田もそうですけれども、真田氏の研究をもっと深化させようといった、そういう動きが学会の中にあります。私がいただいたある方の年賀状に、「最近の戦国史研究は、大河ドラマの刺激を受けて進んでいるようですね」というようなメッセージがありました。なるほどその通りで、戦国史研究会という学会がありまして、駒澤大学でも毎回のよう会場として使っていたりしており、私も出席することがありますが、その後の懇親会でも、やはり大河ドラマについて「この前はこうだったね」とか「あれどうなんだ」とか、そこから研究の実証的な話になる。また会員による関連した研究成果が出されていく。私はそれは素晴らしいことだなと思っていて、私もそれなりに刺激を受けて研究につなげていくということも進めております。

### 第三 戦国時代の井伊氏について―次郎法師の登場―

遠江の領主井伊氏について簡単に申しますと、はじめは平安時代に京都から井伊谷地域に下向した貴族ですね。井伊谷の地域を支配する井伊介、三浦を支配する三浦介、千葉を支配する千葉介といったような名称が古代からありますけれども、井伊介としてこの地域に定着する。鎌倉時代は御家人ですね。したがって井伊氏というのは名門ということ。そして南北朝時代は南朝勢力として存在する。三ヶ日地域を調査しておりますと、井伊氏が籠もった城ですとか、井伊氏が北朝方の寺に侵入し狼藉をしたといった記事のある史料が伝わっていたりして非常に興味深いのですけれども、のち室町幕府に従う。そして井伊谷周辺に一族を分出して、それ

それがその地名を名乗って赤佐とか、貫名とか、奥山とか、井平とか、そういう地域の名を名字として蟠踞していきます。

そして戦国時代の井伊氏は、系譜としては直平、直宗、直盛、直親、直政と続いていきます。その間、井伊氏内部に混乱があったり当主が亡くなったたりということ、次郎法師が登場しますが、この次郎法師をどのように考えるかということ、井伊の系図もいろいろありますが、『寛永諸家系図伝』による井伊氏の系図には直親の横に女子とあり、小さく次郎法師と書かれております。この次郎法師が当主だったのかどうかということもまた一つの議論でもありますし、もし当主としての扱いをするのであればとすると、直平、直宗、直盛、直親そして次郎法師。そして次郎法師イコール、テレビでやっているような直虎なのか、別の人物なのか。そのあと直政が井伊氏を継ぎますから、この直虎と直政の関係はどうであったのかということも出てきます。ここはよくわからないところですが、後ほどふれたいと思います。

直政の後には、直勝と直孝、直勝は後に直継といつて、直孝が本流を継ぐと。直継は新潟の与板藩を継いでいくということになります。この直孝の系統が井伊直弼の方に続いていきました、世田谷区の豪徳寺には井伊直孝の墓もある。井伊家の菩提寺ですね。そういう流れになるわけです。

今日のお話しのタイトルには、直虎を入れています、この辺は難しいところ、大きく二つの史料があります。一つは、これまで主流を占めていた「井伊家伝記」です。「井伊家伝記」は享保一五年（一七三〇）、龍潭寺の住職である祖山が著した史料で、地元の引佐郡の龍潭寺の情報等も集めながら、これを書いたわけですが、これも、そこに女地頭としての次郎法師が書かれている。そして、また次郎法師の文書が龍潭寺に伝えられています。

ところがその後次郎法師は、他の史料に一部で出てきますけれども文書は出しておりません。その後出てくる当主と思しき人物が直虎でありまして、これが、いわゆる井伊谷に徳政を出す文書に花押を据えて出しております。永禄一年（一五六八）一月九日付の「次郎直虎」と関口氏経が連署して花押を据えて出された徳政令

発布に関する文書です。なお次郎法師が永禄八年（一五六五）九月一日付で龍潭寺の南溪和尚に出した文書が同寺に伝えられています。これには次郎法師の署名とその下に黒印が押ししてあります。印文は何と彫られているのかはわかりません。文書の書き出しには「龍潭寺寄進状の事」とあり、八ヶ条にわたる長い内容です。

この二点の文書にそれぞれ署名されている「次郎法師」と「次郎直虎」が同一人物なのかどうか、現在論点となっています。「井伊家伝記」には、「井伊信濃守直盛公息女次郎法師遁世の事」という項に「次郎法師は女にこそあれ井伊家惣領に生まれ候間、僧俗の名を兼ねて次郎法師とは是非無く、南溪和尚御付成され候名なり」（史料は便宜読み下しに直している、以下も同じ）と載っています。これで次郎法師は女性であるということ、女地頭という呼び方をするわけです。さらに「井伊家伝記」には「次郎法師地頭職の事」の項に「これにより、直政公五歳の節、次郎法師地頭ゆえ、井伊家相統子孫繁栄の懇祈の御文言にて龍潭寺南溪和尚へ寄進状を認め遣わされ候事は、永禄八乙丑九月十五日なり」とあります。これが先の次郎法師による南溪和尚宛の文書になるわけです。くだいようですが、次郎法師と直虎の存在、これをどのように考えるのか、ドラマのように同一人物なのか、あるいは別人なのかということ、ドラマはドラマでいいんですけども、やはりこれは考える必要があるだろうということ、大河ドラマが始まって以降、いろいろな方々がいろいろな論点・観点から検討されております。

次郎法師が女性だとすると、これは戦国の女性史研究にとってもその意義はとても大きい。戦国の女性史というと、今まではお市の方とか細川ガラシャ夫人とか、淀殿とか、どちらかという悲劇の女性で描かれている面があったのですが、このように井伊家を束ねていく女性、しかもこうした女性が地方にしっかりと存在しているということが明らかになってきますと、戦国の女性像というのも大きく変わってきます。

もちろん私も、今川氏親の奥方である、ちょうど大河ドラマでは浅丘ルリ子さんが演じていた寿桂尼という女性のことについても調べまして、戦国の女性史研究の一角にその名前を入れていただくようになっていきますけれども、地域における戦国

女性の掘り起こしというものが大事でありまして、この次郎法師が改めて女性であるとされた場合には、戦国期女性史研究にとって大きな意義をもつと思います。次郎法師が生きていた時代というのは寿桂尼と重なってきますし、今川領国の中に井伊谷領があるわけで、おそらく井伊氏一族も寿桂尼の存在を当然知っていたでしょうから女性に跡を継がせるという判断は、寿桂尼の存在があつたからという可能性もあると私は思っております。

改めて、次郎法師と直虎が同一人物か別人かということになりますが、こうしたなかで、最近新たな史料が紹介されました。それが「雑秘説写記」です。これは別名を「守安公書記」といい、現物はあまり公には紹介されていないと思います。京都の井伊美術館の館長がお持ちの史料で、彦根藩の家老であつた木俣守安の聞き書で、享保二〇年（一七三五）のものですが、原型は寛永一六年（一六三九）とされています。この頃の我が国は鎖国に入つた時期ですから、江戸時代の初めです。それが享保二〇年に改めて整理されたということでしょうか。その辺のつながりがわかりませんが、これによりますとつぎのように書かれています。「一 井の谷ハめんめん持にてしづまりかね候に付て、その後、関口越後守子を井の二郎に成され、井の谷を下し成され、然れども井の次郎は若年ゆえに御陣之時は、井の谷衆新野左馬之助の旗下ニ仰せつけられ候也」とありまして、この直虎というのが関口越後守氏経の息子だということにもなつてきたわけです。これを真実とみれば、次郎法師が女性ならば直虎とは別人となつてきます。

そもそも次郎法師の「法師」は、例えば少年期の信長が「吉法師」とよばれたように、少年に付けられることがあり、そこで「次郎法師」は元服前、元服して「次郎直虎」と名乗つたとすれば同一男性となり、そうした説も出されています。これが肯定されれば一気に問題は解決されるわけです。

私は次郎法師は女性であると考えております。「井伊家伝記」の信憑性が問われますが、「次郎法師は女にこそあれ云々」の一節はやはり大きな意味をもっていると思います。直虎は「雑秘説写記」にしたがえば男性です。「したがえば」といいましたのは、直虎の文書が一点しかないのです、さらに穿って考えればその实在の可

能性についても気になるところです。したがって次郎法師＝直虎＝男性という新たな説についてはここでは保留せざるを得ません。皆さんをがっかりさせるかもしれませんが結論は出せないということです。ただ、これらの点をめぐっては、推測を含めまして、私の考えをつぎのところで紹介します。なおこういう史料が出てくることで、そして今後も新たな史料が出てくれば、はっきりとした歴史像が生まれると思ひます。これからは楽しみます。

#### 第四 次郎法師・直虎と井伊谷徳政

次郎法師あるいは直虎のいた時代は、なかなか井伊氏も順当な井伊谷支配ができずに、混乱が多少あつたようです。しかしおそらく井伊谷三人衆とか、一族の人々が合力し、なるべく混乱を防ぐような形で支配をしていったのであろうと思ひます。ところで大河ドラマでもテーマになっておりました、井伊谷徳政につきましても紹介しましょう。この頃の徳政令とは、とくに戦国大名が領国支配のために家臣や領民の借銭・借米の帳消しを意図して出した法令です。井伊谷へは永禄九年（一五六六）に今川氏から出されますが、それを井伊氏は今川のいうことを聞いて執行するの、あるいは井伊氏にとって無視できない銭主という高利貸しもあり、按排を考えながら、時期をまつて徳政令を執行するのかもしれないという瀬戸際の状況に井伊谷があつたというわけです。それは二年間保留された後、永禄十一年（一五六八）一月には徳政令がおそらく執行されたと思ひますが、この頃はもう既に、徳川家康が西の方から入つてくるということが分かつていましたし、それからそもそも徳政令が出される理由の一つに、永禄九年から遡ること三年前、永禄六年（一五六三）ですが、「遠州念劇」という井伊谷を含めた遠江国で国衆たちの反乱が起きるわけです。したがって桶狭間の戦いの数年後に、遠江国は混乱した状況になり、その影響を井伊谷も受けていたと考えられます。そして「遠州念劇」が終わつた永禄九年に今川氏は、たぶん遠江国、おそらく遠江でも西の方ですけれども、つまり井伊谷ですとか、浜名湖の周辺、あるいは浜松、あの辺に徳政令を出す。ところが井伊谷領について

は、さきにもいいましたが井伊氏が徳政令を留保し、二年間待つ状況でもあったわけです。そして永禄一年いよいよ徳川氏がやってくるという噂が流れてくるような時になり、徳政令が執行されるということになるわけです。

なお最近の研究では、戦国期における地域での徳政令が出される理由として、飢饉や戦争にともなう場合、支配者の当主が代替わりする場合などが指摘されていますが、そうした観点からすれば井伊谷徳政は戦乱を背景に、井伊氏が当主の交替、つまり次郎法師から直虎へという代替わりということを理由に徳政令を執行したと考えることができます。さらに推測を加えるなら、直虎の名が関口氏経と連署した文書以外にみられないことからすれば、あるいは直虎は徳政令執行のためだけに創られた存在とすることもできます。つまり徳政令を出すに際して、もしかすると「直虎」は実際には存在せず、「直虎」という人物に「仮託」したのかもしれない。「雑秘説写記」の説についてもなお慎重に扱うべきといえます。そうした意味を含めて、あらためて次郎法師⇨直虎⇨男性と単純には考えられないということをつけ加えておきたいと思います。

## 第五 直政の登場とその生涯

永禄一一年に徳川家康勢力が井伊谷に入ってきますが、井伊次郎法師と直虎がどうなったかは分かりません。しかし大きく井伊谷が混乱したとは史料的にみられませんから、井伊谷三人衆の力もあり平和を取り戻したと考えられます。あとで述べますが、その後直政の登場まであと七年ありますので、直虎はともかくも、おそらく次郎法師は何らか秩序維持に関与したと思われる。その際、菩提寺龍潭寺と後述する住持南溪の存在は大きかったと思います。

そして、ようやく直政が登場することになります。直政につきましては『戦国人名事典』から以下、概要を紹介します。

井伊直政、永禄四年（一五六一）二月一九日の生まれで慶長七（一六〇二）年二月一日に没。徳川家康の家臣。井伊直親の子。母は奥山親朝の娘。幼名は虎松、

万千代。通称は兵部少輔。正室は松平の中でも松井松平康親の娘。遠江国引佐郡祝田村、今の浜松市内に生まれる。今川氏の重臣であった父直親が讒言によって殺害されたので流浪し、天正三年（一五七五）一五歳の時に家康に召し出され近侍した。才知・武勇が人並みではない英雄の素質をもち、美形であると伝えられている。同一〇年（一五八二）一〇月、徳川氏の甲斐進出には使者として北条氏との和睦交渉の任にあたった。このころ、武田旧臣などの兵力二千人ほどからなる旗本一手役の軍団の長となる。三河譜代ではない、若年の直政が登用されたのは異例の抜擢。同年、兵部少輔を称し、終身通称とした。長久手の合戦では先鋒として参陣し徳川氏の勝利につくす。同一六年（一五八八）、豊臣政権に従属した家康に供奉して上洛し、秀吉の奏請で従五位下侍従となる。同一八年（一五九〇）、家康の関東入国により上野国箕輪城（群馬県高崎市箕輪町）で二万石を領した。のちに、同国和田（同高松町）に城を築き高崎と改めた。関ヶ原の戦いでは、東海道方面軍（主力は豊臣系大名）の監軍となった。戦後、石田三成の旧城佐和山で一八万石を与えられた。慶長六年、従四位下に進む。翌七年、四二歳で死去。法名は清涼泰安詳寿院。以上から大まかな井伊直政の動きが理解できると思います。

## 第六 『松平家忠日記』にみる直政と家忠のつき合い

この講座は『家忠日記』に直政が出てくるのが契機となったわけですが、今回行われている展示のパンフレットをみなさんお持ちでしょうか。このパンフレットを読んでいただければ私の話よりもずっと的確ですから、これを是非ご覧いただきたいと思います。私が話している内容もきちっと挙げています。

井伊直政がどのように『家忠日記』に出てくるかということなのですが、その年月日を紹介しますと、①天正一一年（一五八三）一月一日、②同八月二五日（カ）、③天正一四年一月二二日、④天正一七年七月二二日、⑤同二六日、⑥同八月三日、⑦同四日、⑧同九月二九日、⑨同一〇月三日、⑩天正一八年六月二二日、⑪天正一九年一月二二日、⑫文禄元年（一五九二）一〇月七日です。家忠は直政を「井

兵部輔」「井野兵部少輔」「井侍従」「井兵部」「井兵部少輔」「兵部」と表現しています。

はじめの記事は①で、「東条周防娘濱松井兵部輔所二祝言候」とありまして、これは東条松平康親の娘と直政が結婚した内容です。それから②は「会下へまいり候、井兵部少輔殿、東条へ越され候て帰られ候、打出し候、」とあります。直政が東条の所へ出かけてきて帰ったということでしょう。この時義父康親は駿河沼津に在城していました。こうした記事が出てくるということから直政の婚姻に家忠は出かけていったと考えてよいでしょう。そうした両者の間であるからこそ②の記事が書き留められていると思います。

③は秀吉の母大政所が人質を終えて大坂に戻る際、直政が大政所を送っていったという記事で「大政所御帰り候、ふかうそ（深溝）帰り候、井野兵部少輔送りに参られ候」とあります。この発端は、家康が秀吉になかなかに従わないということ、秀吉は自分の妹朝日姫を家康の元に嫁がせます。それでも家康は上洛をしないので、秀吉は今度は最後の切り札のお母さん、大政所を家康の元に、娘の朝日姫の見舞いを名目として、岡崎へ一番大事な人を行かせるわけですね。これは通説です。『家忠日記』天正一四年一〇月一七日には「秀吉御母大政所、家康様御上洛候人質に明日十八日に岡崎迄御越し候間、夜通し御迎に越し候えの由、本田作左衛門尉所より申し来たり候、夜通し岡へ越し候」とあって、家忠は「秀吉の母大政所が、家康様の上洛に際しての人質で明日岡崎に来られるので、夜を徹してその迎のために岡崎へ来るようにと本多重次からいつてきたので、夜を徹して岡崎へ行つた」と書いています。この記事を読んでいて、大政所を迎える家忠の緊張感が伝わってきます。

これで家康は、上洛し、ついで大坂へ行って秀吉と会い、その後、秀吉に対して並み居る大名の前で服従の意を示すというドラマチックな場面が展開されるわけですが、そのころ大政所は、岡崎にいるんです。その警備の任にあった本多重次は大政所の宿舎の周りに柴や薪を積んで、何かあったら火をつけよとの話も伝わっているわけですが、同じ警備をつとめる直政は朝日姫や大政所の所に気軽に出入りして行って、大政所を労ったりしていたようです。そして家康が一月一日

に岡崎へ戻りますと、翌二日に大政所が大坂に戻るわけです。それが先の③です。これは当然ながら日記にはありませんが、その後直政は大政所を送り終え、秀吉にも謁見し饗応をうけています。直政を秀吉はたいそう気にかけ、いわば惚れ込んでいったと考えてよいでしょう。直政は秀吉の思いを感じていたかはわかりませんが、直政は誠実に人問味豊かに人と接する、そういう性格を持ち合わせていたようです。

④と⑤は能の催行ということ、これは直政のところで家康を招いて能が行われるところ、雨が降ったということで延期され、二六日に雨がやんだので、直政のところで行われたことが記されています。ここには家忠も出かけていつているでしょうから、両者の文化的な交流が行われていたと思われまます。

⑥と⑦ですが、これは京都方広寺の大仏殿建立のために、既に一六年頃から始まっていますが、富士山麓で木引、つまり材木を徴発すること、家忠も直政も動員され出かけていくんです。最初に家忠は、直政の組となっていたのですが、八月四日に、これは間違いであったということで、酒井宮内の組に入ったという記事です。編成の違いもあったようですが、直政も家忠も、ともに方広寺の大仏殿の材木の木引に参加している。そうした縁もあり、富士山麓という場所で、両者はお互いに振る舞いをうけたり、揃って他の家康重臣の振る舞いをうけた様子が⑧や⑨の記事から想起されます。おそらく直政と家忠はともに親しく交流していたのでしよう。考えてみますと、既に述べましたように家忠は家康の従兄弟、直政は家康の娘婿ですから、血は繋がっていないけれども非常に近い関係にある。そういったようなことは直政と家忠の間をより深くしていく大きな要因でもあったのではないかと思います。

## 第七 戦国武将の日常と修養、そして禅宗・禅僧

『家忠日記』には家忠が戦に出かけていく、あるいは城普請に出かけていく、城の番をするというような出来事も書かれておりますけれども、それ以外には様々な

日常生活の様子が書かれております。とくに多いのは贈与と振る舞いで、それだけ周囲の人々との交流が盛んです。文化としての連歌や茶の湯なども行われ、機会あることにそうした寄り合いがあり、家忠はそれを催したり、他の席に積極的に出かけていきます。そして先祖供養や父祖の菩提を弔う、ちゃんと月命日には本光寺に出かけていきます。こうしたことは年中行事とも関わってきますし、それらが大きな意味をもっているわけです。

また、グルメかどうかわかりませんが、初物としての鱈や初瓜、茄子、夕顔、楊梅、松茸、米などの記事。あるいは川で鯉や鮒をとる。鷹狩の獲物を家康から贈られたことなどが記されています。もちろん貴重な政治情勢の見聞記事も多く、そうした収集にも家忠は意欲的であったことがわかります。毎日の天候などは必記事項ですが、当然「なえゆる」という地震の記事もできます。じつに当時の戦国武将の日常生活が豊かに、しかし簡潔に記されています。

そうした日常生活のなかでの禪・禅僧や仏教との関りについて少しお話をしたいかと思いますが、『家忠日記』をみますと「会下」という語がよく出てきます。ここでいう会下とは本光寺を指します。山号は瑞雲山、曹洞宗の寺院です。家忠は先祖の供養、あるいは父祖の弔い、そしてさまざまな行事への参加、自身の修養などのために会下を訪問するということだと思えます。その回数をかぞえようと、かなり多いといえます。

家忠の時代、本光寺は五世快翁存幸と六世義岫如総が住持でありまして、二人からいろいろと学んだと思えます。『家忠日記』の文禄三年十月の記事のなかには、「会下に参り候、法門候」とあって、法門とは仏法とか仏の教えという意味ですから、家忠は本光寺に出かけて行って、住職の如総から禅の講義を受けているわけです。またそれに続いて「僧たたかれ候」ともありますから、これは家忠が座禅中に寺僧から警策でたたかれ、「警覚策励」を受けたということでしょう。その様子が想像されます。家忠にとって本光寺は、心の拠り所でもあったと思えます。禅宗・禅僧が戦国武将にとって大事な役割を果たしていたかということ、この日記から感じることができると思います。

井伊氏の場合は、臨濟宗の龍潭寺が井伊谷にありまして、直政の時代は、テレビでも出てきますが、南溪瑞圃の時代です。南溪はずいぶん長命であったようで、天正一七年九月に没したということです。「井伊家伝記」には「遠州井伊谷龍潭寺の事」とか、「直政公、南溪和尚へ禅法を御問候事」ということで、直政が南溪和尚に禅法を尋ね、戦場ではどうしたらいいかを問うています。これは私の専門ではないので、ここではうまく説明できませんけれども、いずれにしろ直政が龍潭寺、龍潭寺は臨濟宗で曹洞宗と同じく禅宗ですが、禅僧に禅法を問う教えを乞う姿勢をもち修養を深めていくということを行って行く。これは禅宗・禅僧が果たした戦国武将への役割の一つといえるのではないかと思います。

また直政の画像が彦根城の博物館にありまして、直政没後まもなく制作されたもので、これには臨濟宗妙心寺派の傑僧たる鉄山宗鈍（一五三三―一六一七）の賛が記されています。賛の書き出しは「遠州井伊侍従」とあり結びを「遠江」として、「遠州（江）」が強調され、その井伊直政ということですから、宗鈍は直政を遠州を代表する人物と評価していたのではないかと思います。宗鈍は甲斐の出身で、武田家臣もしくはその家に仕えた従者の家に生まれたとされ、恵林寺で得度し、駿河今川義元の師ともいわれた太原崇孚のもとに参じ、その弟子の東谷宗杲に師事し、その後は駿河臨濟寺の第四世をへて、妙心寺の第八〇世住持をつとめ、さらに家康の招きを請けて武蔵野火止（埼玉県新座市）の平林寺住持にもなっています。

直政と宗鈍の関係は明らかではありませんが、武田が滅びた後、宗鈍は、武田遺臣との交流や甲斐地域の安寧に務めたようです。直政も家康の命を受けて武田遺臣への対応を始め、家康の甲斐支配が順調に進むべく尽力していましたから、そうした両者のもつ甲斐への行動や意識については、相互に知っていたことと思います。この点で『家忠日記』には興味ある記事があります。それは天正二十（文禄元・一五九二）年八月五日に「跡大炊助所にりんさい寺越され候て、和漢候」という一節です。この日跡部大炊助の所に駿府の臨濟寺がやってきたとあります。この場合の臨濟寺は宗鈍のことで、跡部大炊助は旧武田家臣跡部勝資の子昌勝です。そこで「和漢（朗詠集）」を宗鈍が講じたということでしょう。そこに家忠も出掛けていっ

たのだと思います。そうすると宗純と家忠は面識があったわけで、家忠を通じて直政と宗純とが知り合った可能性があります。宗純による直政画像への賛は、そうしたことも背景にあったのではと思います。

知られているところですが、戦国武将にとっての禪、あるいは禪僧というのは、いうまでもなく武田信玄には岐秀元伯、後の快川紹喜がおりますけれども、上杉謙信には天室光育、徳川家康には先の太原崇孚、伊達政宗には虎哉秀乙といったような禪僧がいるわけでありまして、そこから彼らは人間としての修養、あるいは人格の形成、戦国社会にあつては指導層にとつての必要な力量を鍛える、あるいは備えていったといえます。現代社会は非常にシステムが発達していますけれども、戦国時代というのは、やはり個人の力量が非常に問われる時代でありますから、自分を高めていく、つまり「人間力」を発揮しえるには、やはりそこに禪宗の僧侶、あるいは禪宗の教えというものが大きな意味を持ったのではないだろうかと思ひます。

戦国期の諸相を理解する上でも、禪・禪寺・禪僧に関する研究は今後大事な課題のひとつであろうと思ひます。これは『家忠日記』でも禪の存在を意識できますし、また直政の生涯を追つてもそういうことがいえると思ひます。

## 第八 直政という人物―家康の評価―

ところで最近、井伊直政に関する研究が野田浩子氏によってまとめられました（『井伊直政 家康筆頭家臣への軌跡』戎光祥出版 二〇一七）、この研究は現在における直政研究の到達点を示していると思ひます。この研究から学ぶことは多く、その成果にもよりながら、私なりに直政という人物について紹介しましょう。

まず直政は、野田氏がいわれるように卓越した交渉力、外交力をもっている。これは例えば、本能寺の変の後に起こった天正壬午の乱と関わって、甲斐国の武田遺臣の帰属をめぐる交渉ですとか、それから特に大きな活躍をしたのが、関ヶ原の戦いの前と後ですよね。合戦前にも直政はいろいろな武将との駆け引きを行う、そして関ヶ原の戦いがある、その後も九州の島津ですとか中国地方の毛利ですとか、

諸大名との間に合戦後の関係を新たに築いていく交渉をする、その他さまざまな戦後処理をこなしてしていくわけでありまして、そこに直政の人物像が示されていると思ひます。

また、先ほど第六の「『家忠日記』にみる直政と家忠のつき合い」で紹介したように、直政は大政所を訪ねていくとか、そのほかにも例はございますけれども、非常に細かい気づかいをする武将でもあったようです。さらには、後で出てきますけれども、家康に対して適切な意見を提示する。的確な判断をする。野田氏は、直政が発揮したのは「敵・味方という立場を超えて相手の身になって考える」外交術で、それが「対外勢力を味方につけることに成功したのである」とされていますが、この指摘は注目されます。先の例でいえば、大政所を労い誠実に対応する、そうすると秀吉とは敵対はしておりませんが、秀吉が直政の方にググッと寄ってくる。そういうことだと思ひます。これらの点から、直政の人物像が浮かび上がってくると思ひます。

これまで述べてきましたように、直政は家康に重用され、その後も井伊氏は有力な譜代大名として江戸幕府政治を担っていくことは周知の通りです。井伊氏にとつても直政の存在は当然ながら大きく、『寛政重修諸家譜』に掲載されている井伊氏系図には、直政については長い記事となっています。なお『寛政重修諸家譜』とは、文化九年（一八一二）九月に完成した江戸幕府編修の大名・旗本を中心とした系譜集です。

そこで直政の記事の一部を紹介しますと「そののち直政を御前にめされ、天下の大戦にしばしば先鋒の將として勝利を得こと、誠に開国の元勳なりとて、上野国高崎をあらためて、三成が居城近江佐和山城をたまひ、六万石を加恩せられ、同国および上野国のうちをいてすべて十八万石を領す」と書いてあり、家康は直政を評価して、「開国の元勳」といったとしています。この場合の「開国の元勳」というのは、「国を開いた」つまり江戸幕府を開いた「最も功績のあった人物」と、直政に対して最大限の賛辞を送っているというわけになるわけです。

このことについて野田氏は、直政の功績を示す言葉としての「開国の元勳」が使

われたもつとも古い例は『寛政重修諸家譜』に先行する江戸時代初期、寛永一八年（一六四一）の『寛永系図』であって、ここには「天下の大戦を争い、度々先鋒の將として勝利す、誠に開国の元勳なり」とあり、これは直政に近侍していた彦根藩士の岡本宜就が著したもので、実際に家康が直政に「開国の元勳」といったというよりは、宜就が家康から直政にいった言葉を聞いていて、その意図を中国古典に通じていた宜就が、漢文体で端的に「開国の元勳」としたのではないかとされています。まことに興味深い指摘ですが、加えて直政の人物像、家康の直政評価として注目される家康の訓戒状を紹介します。

まず、その前提からお話ししますが、慶長一七年二月二五日に家康が駿府から江戸城にやっております。なぜやってくるのかというと、秀忠の夫人、彼女は浅井長政の娘で淀殿の妹ですが、秀忠との間には子供がいます。長男が竹千代で、後の三代將軍家光。その弟が国松・国千代、後の駿河大納言忠長です。忠長の方を秀忠夫人はさかんに可愛がる。それを家康が聞いて、今後、徳川の家を作っていくには、きちつと兄弟でも上下関係をはっきりとそれぞれに自覚させ、長男を当主にしないと将来に影響するというのが家康の考えですから、わざわざ駿府からやってきて、秀忠夫人をたしなめ、その後一七ヶ条にわたる訓戒状をしたためます。

訓戒状の最後のところには「右の趣どもよく御申し聞かせ、ただ直ぐに父子兄弟の中、礼儀作法乱れぬ様に、くれぐれも御育て成さるべく候、右の文は国（忠長）へ御渡し置き、成人の後も能々相心得候様、御おしへならるべく候、かしく」とあります。家康はよほど忠長のこと心配、心配というのは危ないということ。ことさら秀忠夫人が忠長のことを可愛がるので、これは徳川の将来を考えると危ないと思つたわけです。この訓戒状は忠長に渡して、よく教えなさいと。

この史料は、かつて徳川黎明会の会長で、尾張徳川美術館長をつとめられた徳川義宣先生が『新修徳川家康文書の研究』に載せられまして、家康の遺言ということ。「人の一生は・・・」とあるけれども、あれは実は明治期に旧旗本が作り上げたもので本當の遺言ではない。むしろ本當の遺言ということでは、慶長一七年、あと数年で家康は亡くなるわけで、この訓戒状が遺言に相応しいと位置付けをされ

ました。そのなかの九条目です。ここには「一、井伊兵部事、平日言葉少く、何事も人にいさせて承り居、氣重く見え申候得共、何事も了簡決し候へば、直に申者にて候、取わけ我等何ぞ了簡違いか評議違いか、為にならぬ事は、皆人の居ぬ所にて物知らかに善悪申者にて候、それ故、後には何事もまず、内相談いたし候様に成り申し候、」とありますが、ここには家康による直政の人物像とその評価が示されています。家康は直政について、「彼は日頃は言葉は少なく、何事も人にいわせて聞いていおり、氣重にみえるが、何事も決定した時には直ちに発言をしてくれる。とりわけ自分たちに何かしらの考え違いや、あるいは評議内容に違いがでる無意味なことは、他人のいないところで穏やかに忠告してくれる。したがって、その後は何事もまず、直政に事前に相談をする」といっています。これが家康自身による、おそらく真実の直政評ではないかと思っております。じつはこの史料はあまり、当該研究の中でも注目されてはいないんですけれども、もつと注目されている。私は直政の評価の中で、これが一番適切ではないかと思っております。このように家康は直政に全幅の信頼感をもっていたということです。

#### おわりに——直政と家忠——

考えてみれば、家康にとつて家忠は義理ながら従兄弟、庶家ですから一族です。徳川家臣としての直政ですが、直政は単なる家臣ではなく家康の養女の夫、すなわち婿で、息子ということになり、家康にとつて二人が重要な存在であることはいうまでもありません。そしていえることは、家忠の役目というのは家康にたいする徹底した軍事的な貢献です。これには城郭普請も入ります。この象徴が慶長五年の関ヶ原の戦いの前哨戦の伏見城の戦いで奮戦して壮絶な戦死を遂げたことです。松平家本来果たすべき生き方を徹底した存在であると思えます。

いうまでもなく直政は、いわゆる「徳川四天王」の一人で「武」に勝れた人物です。直政は戦に出陣し勲功をあげていますが、そもそも戦、軍事というのは、その前提として相手への外交交渉がおこなわれ、それが破綻したときに生じるものです

から、まず外交交渉が第一であるわけで、直政の場合は「武」以上に徹底した外交交渉等を通じた家康への貢献であるといえます。その最たるものが、関ヶ原の戦いの前後における外交交渉でしょう。関ヶ原合戦において、家康と近い家忠・直政による、一方では戦死、一方では外交戦略ということが、その後の家康の天下人に結実をするということです。

ところで、家忠は伏見城で戦死しますが、それで深溝松平氏の家康に対する徹底した軍事貢献が終わったわけではありません。家忠の跡を継いだ忠利は、関ヶ原の戦いに父家忠の「弔い合戦」を果たすべく参加しようとはしますが、秀忠に居城たる下総小見川城を守備するよう命じられ断念し、その後の大坂夏の陣に際しては「亡父家忠がこと、常におもひにたえず、若し上方に御合戦あらば、先がけを承らんとこそ存ずれ」（『寛政重修諸家譜』）との決意を示しています。しかしこれも受け入れられませんでした。しかし、弟忠一については、つぎのようにあります「元和元年大坂の兵ふたたびおこりし時、忠一傍輩にむかいて、このたびの戦い終わりなば、天下永く一統に帰し、わが生涯には、また干戈を動かす事あるべからず。さればこのたび武名をあらわさずして、またいつを可期すべきや。われ幸いに先手にあり、一陣に進みて、父祖の忠死につくべしとかたる。果して五月七日の戦いに、衆に抽んで競い來たる敵の中に馳入り、勇を奮いて戦死す」（『寛政重修諸家譜』）とあります。しかし先の忠一の行動は、戦場での違反行為と位置づけられ、深溝松平氏の名誉とはならないものとなってしまいました。

こうした深溝松平氏の家康（徳川）宗家に対する徹底した軍事貢献は、おそらく他の松平庶家より抜きん出たものであったと思います。これが深溝松平氏の「家風」であったと思います。

以上、『家忠日記』からみる井伊直政の存在と松平家忠の関係、そして家康とのつながり、さらに戦国武将と禪・禅僧についても少しですが紹介しました。むずびにはなりません、直政と家忠の役割が家康に果たした大きな意味、それは家康を支えた力ということですが、両者の修養はおそらく禪・禅僧によって日常的に鍛えられていったと思われる。しかし、これらのより具体的なことは今後の研究課題

になるということをお願いして終わりにいたします。ご清聴ありがとうございました。

（くぼた まさき 駒澤大学文学部教授）

（編集部注）本稿は平成二九年一月一七日、第三八回禅文化歴史博物館セミナー

（於駒澤大学中央講堂）として行われたご講演をもとに、収録したものです。

久保田先生には謝して御礼申し上げます。

## 井伊直政略年譜

※ 網掛け は『家忠日記』からの記述を表す

年代	西暦	数え年	事項	『家忠日記』の原文 ※ゴチック体は井伊直政の登場箇所
永祿4	1561	1	2月19日、井伊直親の子として誕生。母は奥山氏娘か。	
永祿5	1562	2	12月14日、父直親、今川氏により謀殺。	
天正3	1575	15	徳川家康の小姓として出仕。万千代を名乗ったという。	
天正10	1582	22	元服し直政を名乗る。この頃、兵部少輔を名乗る。 6月、本能寺の変。家康の伊賀越えに同道。 武田氏旧領をめぐる北条氏との講和に参画。 この頃、「井伊の赤備え」が誕生。	
天正11	1583	23	1月11日、松平康親の娘と祝言をあげる。 8月21日?、東條(嫁の実家康親の所か)に行き、帰ってくる。	①東條周防娘浜松 <b>井兵部輔</b> 所ニ祝言候、【冊四】 ②□下へ□いり候、 <b>井伊兵部少輔</b> 殿東條江被越候て被帰候、打出し候、【冊四】
天正12	1584	24	小牧・長久手の戦いで戦功をあげる。	
天正13	1585	25	真田氏との戦いに参陣。	
天正14	1586	26	11月12日、人質として三河に来ていた大政所(秀吉母)が秀吉のもとに帰る見送りとして大坂へ。	③大政所御帰候、ふかうす帰候、 <b>井野(井伊か)兵部少輔</b> 送ニ被参候、【冊五】
天正16	1588	28	4月、聚楽弟行幸に供奉。侍従に任官され昇殿を許される。	
天正17	1589	29	7~11月、方広寺大仏普請のための木材を富士山から運ぶ木引に従事。 7月21日、駿府の直政の所(宿所か)で行われる予定だった能が雨で延引。 7月26日、直政の宿所で能が行われる。 8月3日、家忠の木引の組は直政の組であった。 8月4日、家忠の木引の組は直政ではなく酒井家次であった。 9月29日、直政の宿所で振る舞いが行われる。 10月3日、本多忠勝とともに朝飯を家忠に振る舞われる。	④御能 <b>井侍従</b> 所候、雨降にて延候、榊原式部大輔、信州真田へ沼田の城さかみへ渡しニ被越候、京都よりハ富田平右衛門、津田四郎左衛門尉けんしに被越候、沼田城うけ取候ハ、氏真(直か)上へ出仕可被成候、【冊五】 ⑤ <b>侍従</b> 所にて御能候、十番、松風のつゝミ天下一仁助事也、道知被下候、【冊五】 ⑥かしまの舟てこし候、石川五左衛門尉所へふる舞にてこし候、上出小屋場迄、木引のくミ、 <b>井侍従</b> 之由候、一昨日より道作、【冊五】 ⑦雨降、 <b>井侍従</b> 殿普請くみちかい候て、酒宮内くミニ入候、【冊五】 ⑧雨降、 <b>井侍従</b> 所江ふる舞にて越候、【冊五】 ⑨雨降、朝本田中書、 <b>井侍従</b> 殿ふる舞候、夕めし本中書へふる舞にて越候、【冊五】
天正18	1590	30	4月19日、北条氏の津久井城を攻撃し戦功をあげる。 6月22日、小田原城に夜襲をかける。 7月、家康、江戸城に入る。上野箕輪城を与えられ12万石を領す。	⑩夜雨降、 <b>井侍従</b> 敵丸のりくつし候、【冊六】
天正19	1591	31	9月、陸奥九戸城に九戸政実を攻め戦功をあげる。 11月12日、浅野長政より贈られた白鳥が、家忠によって直政のもとに届けられる。	⑪去年浅野彈正殿あつけられ候、白鳥箕輪 <b>井兵部</b> 殿へと、け候、【冊六】
文祿元	1592	32	江戸城留守居を務める(朝鮮出兵により家康が肥前名護屋に出陣のため)。 10月7日、榊原康政とともに、秀吉の朝鮮出兵の命に背く下妻の多賀谷重経のもとに、板部岡江雪の指示で派遣。重経に金1133枚の提出と上洛を命ず。 この金は後に、1000枚が秀吉に、100枚が秀忠に、30枚が直政・康政に、3枚が江雲斎に届けられた。	⑫城へ出仕候、宰相様今度中納言ニ御成候、多賀屋下つま今度から入御ともニ虚病ヲいたし候て不相越候て、太閤様より江雪云前小田原ニ候半そく御使、此方之衆 <b>井兵部少輔</b> 、榊原式部大輔兩人御つかいにて金子千百三拾三枚いたし、居城おり早々上洛仕候へ之由候、少も難渋申候は、宰相様御人数にて御成敗候はん由候、 (頭書)「彼金千枚太閤様へあかり候、百枚ハ宰相様へ参候、三十枚ハ <b>兵部</b> 殿、式部殿参候、三枚ハ江雪とり候、」【冊六】
慶長3	1598	38	高崎城を新築し、箕輪城より移る。	
慶長5	1600	40	9月15日、関ヶ原の戦いにおいて軍監を務める。島津方により銃弾を受け落馬。 戦後、西軍総大将毛利輝元との講和交渉に当たる。 佐和山城を与えられ高崎と併せて18万石を領す。	
慶長7	1602	42	有馬温泉で療養。2月1日、彦根にて没。	